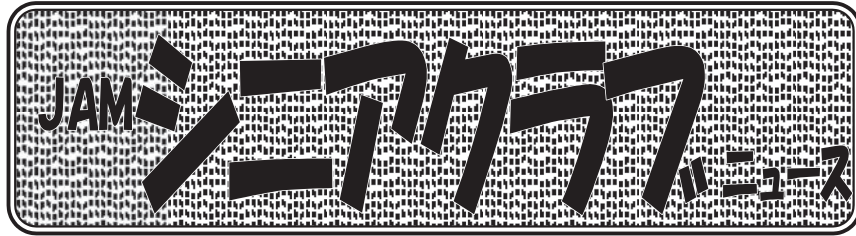


地域組織の確立で  
会員間の絆の促進を



第116号

発行日 2017年4月25日

発行者 JAMシニアクラブ

mail jam-senior@jam-union.jp

発行所 東京都港区芝2-20-12 友愛会館11階 JAM本部内 〒105-0014 電話03-3451-2650 fax03-5440-7389

## 退職者連合 傍聴行動

### 衆院厚生労働委員会で採決を強行

### 介護保険法の改悪は許さない

### 国会傍聴行動に参加

政府は12日の衆議院厚生労働委員会で、介護保険法改正案の採決を強行した。国会での本格的な論戦が始まったばかりだ。シニアクラブは、退職者連合の仲間と共に4月5・7日に亘って厚生労働委員会傍聴行動に参加したが、介護は命と暮らしに関わる重要な問題、参議院では腰を据えた審議をするよう国会動向に注目しましょう。

4月5日の傍聴行動  
は9時30分に衆議院議  
員面会所で集会を開催  
し参加者の意思統一を  
図った。冒頭、民進党  
厚生労働筆頭理事の柚  
木道義議員が「介護は  
すべての人に関わる課  
題、社会全体で支えて

いける制度にしなければならぬ。傍聴席から心の中で激励の拍手をお願ひします」と委員会に臨む決意を述べた。それを受けて退職者連合の阿部保吉会長は「民進党の対案を実現するためには全員が被保険者になって財政を確立し制度も格差をなくすこと、これが我々の要求だ。制度を崩壊させないために連携して頑張っていく」と

概を飛ばし、連合の平川総合局長からも連帯の挨拶がされた。その後、退職者連合30人と連合10人の全員が所持品チェック後、衆議院第16委員会室へと移動。傍聴行動に入った。傍聴席に着席できない人がいるほどの注目度と警備の厳しさを感した。委員会では民進党から阿部知子・大西健介・中島克仁・長妻昭・郡和子・岡本充功委員が

質問に立った。委員からは15年につ割に上がった自己負担の影響を「政府は影響ないとするが利用者の声は違つ。貯蓄の取崩しや利用を減らし他の支出を切り詰めている」と、政府の実態検証と分析の甘さを指摘、介護を受け給与収入がある者の例や税制と医療介護負担が同時に掛かる特殊な人への検討の甘さなどを指摘、担当官が答弁に窮する場面が見られた。さらに、介護医療院や介護離職、介護人材確保事業・定着支援金施策の不備・杜撰さにも鋭く切り込んだ。傍聴後、阿部会長は「6議員は厳しく追及していくつかの修正も実現した」と総括した。

世界情勢は経済、安全保障等すべての事象が不透明感を増しています。要因は自国中心、保守主義の高まりと思われれます。米国ではアメリカファーストを唱えるトランプ大統領の登場があります。どこの国のリーダーも自国の繁栄と安全を優先し各政策を実行しようとするのは当然でしょう。問題はその実現方法と手段にあります。米国の動向は我が国のあり方、私たちの生活にも多大な影響を発生させることでしょう。安全保障も我が国周辺には危険が潜んでいます。日韓関係は次期

核、ミサイル開発を優先し国際的緊張を高めています。このままでは米国の衝突は避けられません。朝鮮半島で一旦事が起これば日本も無傷ではありません。日本は70年前に多くの犠牲と引換に民主主義と平和な社会の実現、

孤児となった方々の嘆きや苦しみを少しは知っています。二度とこのような悲惨な社会を子や孫に味あわせてはなりません。オバマ大統領が広島を訪れ国際平和のメッセージを発信され核兵器の廃絶が進めばと期待していました。が、先の国際会議で、政府の立場は核の傘の下米に配慮し後退しています。残念でなりません。私達は核兵器の恐ろしさや自然災害の恐ろしさも体験しました。歴史に学び、先人の苦労や努力、知恵を活かしていかなくてはなりません。政界、財界、学会様々な分野のリーダーの方々、また今からリーダーを目指す若い皆さんにお願いします。「治にあって乱に備える」こんな気風と気概を持つリーダーになってください。

## 歴史に学び

## 活かせるリーダーに

### 広島シニアクラブ代表幹事 北原 治

## 主張



大統領次第で暗雲が立ち、北朝鮮は独裁者のもとと世界を相手に独自の道を歩み、国民の生活より

経済発展に邁進してきました。私は広島育ちであり、姉、兄は学徒動員で被爆し爆風と高熱で、多くの方々が亡くなられた惨状を聞かされており、戦争で身体が不自由になり白衣を着て駅前にたたずんでおられたり、

概を飛ばし、連合の平川総合局長からも連帯の挨拶がされた。その後、退職者連合30人と連合10人の全員が所持品チェック後、衆議院第16委員会室へと移動。傍聴行動に入った。傍聴席に着席できない人がいるほどの注目度と警備の厳しさを感した。委員会では民進党から阿部知子・大西健介・中島克仁・長妻昭・郡和子・岡本充功委員が

### シニアクラブホームページの宣伝 ホームページを開張しました。

パソコン、スマホから「JAMシニアクラブ」と入力し検索するとつながります。機関紙、共済、本部・地方活動、生活情報などを掲載しています。会員の皆さんで活用ください。アドレスは <http://jam-senior.club/>です。

社会保障に関する2017年春の要求

通常国会における論戦が始まった。JAMシニアクラブは退職者連合の仲間と共に国会の厚生労働委員会を傍聴する行動に参加している。3月号では医療制度に関する要求を掲載したが、4月号では介護保険制度に関する要求を掲載。介護は私たちの生活に直結することであり、多くの仲間と共に今後の国会審議の進展に注目し行動しましょう。

II. 介護保険制度について

①地域包括ケアシステムを積極的に推進すること。

地域包括ケアシステムの推進にあたっては、上意下達にならない形で国・都道府県・市区町村が協力すること。

介護保険の給付対象を狭めて総合事業に移行することを、地域包括ケアシステムの一環と称しないこと。

②利用者負担割合の3割負担新設を撤回すること。

利用者負担割合を現行の1割、一部2割負担に加え、現役並み所得相当には3割負担も新設するとしている。応能負担原則は否定しないが、介護費は経常的長期的費用であるため、臨時的・短期的費用である医療よりも低い負担割合限度を維持しないとサービス利用者者が困難になるので3割負担新設には反対する。

③高額介護サービス費の負担上限額を引き上げないこと。

高額介護サービス費の負担上限額を高額療養費の上限額変更にあわせて引き上げるとしている。医療費以上に生活的側面が強い介護の自己負担額を増やすことは当事者の生活を

圧迫することになる。与党調整等を通じて当初案より一定程度緩和されているが、近い将来の再引き上げも危惧される負担上限額引き上げには反対する。

④高額介護合算療養費制度の負担上限を引き上げないこと。

高額療養費と高額介護サービス費の自己負担拡大自体に反対しており、これと連動した高額介護合算療養費制度の負担上限引き上げにも反対する。

⑤要介護1・2の生活援助サービスを介護保険から切り離さないこと。

工程表が求めていた要介護1・2の生活援助サービスを介護保険から切り離して総合事業へ移行することは今後の関連審議会のまとめでは言及されていないが、18年介護報酬改定では当該事業の介護報酬切り下げと人員基準見直しを実施する方向が示された。問題の多い要支援者への給付の市町村総合事業移行でさえまだ3分の1しか進んでいない中で

要介護1・2の移行は論外。軽度者に対する適切なケアで重度化を防ぎ、介護保険財政の負担を軽減するなどの観点から、要介護3以上のみの介護保険制度にすべきではない。

⑥調整交付金を利用して制度運営コントロールを強化しないこと。必要な自治体間調整は別枠で財源を措置し、25%の国費負担分は全部を保険者に交付すること。

調整交付金の年齢区分細分化、交付区分整備の名目で市区町村に対する制度運営コントロール強化を図ることは問題である。根本的には交付金財源は別枠で財政措置し、国費負担分の25%全部を保険者に交付すべきである。

愛知年度会 認知症患者への介護問題  
2017年度学習 ひとりで抱え込まないで

愛知シニアは、3月25日(土)「ワークライフプラザありあろ」で会員並びに地協役員43人の参加を得て、2017年度学習会を開催した。



講師には、看護師今井恵子氏(名古屋市中熱田区いきいき支援センター)を招き、2時間余に亘り講義を頂いた。

わが国は高齢化の進展と共に2030年には認知症の人が744万人に膨れ上がると推計されており、社会問題化の背景になりうる要素を秘めている。認知症になっても、安心して日々を暮らして行けるよう、認知症についての正しい知識を持ち、認知症の人や家族を温かく見守り、支える手立てが必要なことを学習した。

熊谷 悠之通信員

①認知症とは、老化による物忘れとは違い、脳の神経細胞がいろいろな原因で、死んでしまったり、働きが悪くなったりのしてネットワークが損傷されることで障害が起こり、生活するうえで支障が出ている状態(例 老化II朝ごはんを食べた物を忘れていた。昔活躍した歌手の名前が思い出せない。認知症II朝ごはんを食べたことを忘れていた。)

②認知症の症状では、本人の性格、人間関係、取り巻く環境要因が絡み合っており、うつ状態や妄想などの精神症状、徘徊、興奮・暴力、不潔行為等、日常生活を困難にする行動



動上の問題が起こる。③認知症の人への支援では、さりげなく援助できる「人間の杖」となること。街のあらゆる場所に暖かく見守ってくれる環境を作る事や認知症という病気を理解し、今まで通り友達・友人Aさんと障害を補いながら付き合う。④認知症の介護では本人の言動を一方的に非難しないこと、従前と変わらない「個人」として接し、思いを共有する。高齢者が高齢者を介護する「老老介護」は今や逃れられない現実となっている。家族だけでは到底十分な介護は出来ない。介護保険、養護老人ホームなどの施設介護も限界がある。だが、認知症の高齢者にとって接するべきか、「人間」としての尊厳をどう保っていかか新しい施策が必要であると結んだ。認知症患者を地域で見守るのは必然的な社会の流れとならなければならない。試行錯誤しながら地域での環境創りが肝要である事を学習した。